

## 保育者養成校における演習「幼児音楽表現」と学生の学習プロセス —ワークショップと『窓ぎわのトットちゃん』のレポートより—

和田 幸子

大阪市立大学大学院生活科学研究科後期博士課程

### Music expression of children in the learning process of nursery attendants - an experience with the book “Totto-chan: The Little Girl at the Window”

Yukiko WADA

*Graduate School of Human Life Science, Osaka City University*

#### Summary

Nursery attendants must find musical elements in the sensitivity and expressions of children, in order to lead musical activities. This paper is based on observations at a nursery attendant educational session, where the instruction material was based on the bestseller "Totto-chan: The Little Girl at the Window". It was found that children find their own sensitivity as well as others, and that nursery attendants must understand children and take good care of their ward's individual characters. As part of their training process, the attendants learned various musical education methods based on children's sensitivity.

**Keywords :** 保育者養成、幼児音楽表現、ワークショップ、レポート課題

*Nursery Attendant education, Music expression of children, Workshop, Homework report*

#### はじめに

保育者は目の前に居る子どもが何に興味を持ち、どのようなことを考えているのかを、知ろうと努める。たとえば子どもがどこに視線を向けているのか、どのようにして手を動かしているのかというような動きの中に、保育者は子どもの興味を読みとろうとする。この興味に子どもの表現が表われているからである。

このように、保育者が子どもを理解しようと努めるとき、「表現の主体としての子ども」という視点があることに気づく。保育者は、子どものこの表現を引き出していく働きをしていると言っていい。

音楽は子ども達を、表現することと、人と共感を持つような活動へと導いていく。そのような視点に立つと、保育者が持つべき音楽性は、楽器演奏や歌唱の技術のみ

を問うのではないことがわかる。音楽技術を子どもの表現に添わせていく柔軟さと感性が、保育者には求められるのである。

筆者は保育所勤務を経て障害児保育に長年携わり、子ども達との音楽表現活動を実践してきた。保育者になって間もない頃は、筆者自身が学生時代在籍した幼稚園教員養成課程での演習「音楽リズム」で受講して得た音楽表現法を思い出し、それを子ども達と行うという繰り返してであった。同僚の先輩保育者がしているように同じくしてみることもあった。また保育アイデア集のような図書からアイデアを得ることもあった。しかし、もし学生時代に演習で実際に歌い遊んだ経験がなかったら、図書からのアイデアを実践場面に適応させていくことは難しかっただろう。演習の中で、保育案を実際の保育実践に

立ち上げていく際の音や動き、人の気配を感じながら実践する体験をしていたのである。こうして新任時代は、学生時代の演習で受講したことを基礎として、自分の保育レパートリーを作っていたといえる。

ところが保育経験年数を重ねると、違った状況や心境が生じてきた。それは保育内容がマンネリ化しているのではないかという危惧である。たとえ同じ音楽遊びを子ども達としても、新しく出会う子ども達と新しい気持ちで取り組めるのであれば、それはマンネリ化ではない。その音楽遊びは、保育者と子ども達とで毎年のように繰り返され展開される園の文化になりうる。そうでなく保育者自身がわくわくする感性を失ってしまって、型どおりの活動を繰り返していくと、子ども達の音楽遊びも勢いをなくしてしまう。筆者自身もこのような固定化した状態になっていないかと、振り返りながら保育に当たっていた。子ども達と一緒に創っていく音楽活動の方法や実践例を知りたいと強く考えるようになったのもこの頃である。

そこで筆者は、音楽教育のワークショップ研修会への参加を重ねた。その内容は、オルフ、コダーイのアイデアに基づくもの、わらべうた、サウンドスケープなどであった。

そのなかで筆者が特に共感したのは、20世紀半ばに南ドイツで活躍した音楽教育家、カール・オルフのアイデアであった。幼い子ども達の音楽活動は音楽単独ではありえず、体の動きが伴うこと、そして言葉のリズムがつくり出していく音楽があるという考えである。そしてオルフは、音楽教育のアイデアは身の周りの生活環境の中にあり、指導者は子どもの様子と興味から、アイデアを見つけ出していく必要があると提案した。音楽を聴覚だけでなく、あらゆる感覚を使って感じていこうとするものであった。これは幼い子どものありように無理なく添っていく音楽活動となる可能性を持つ。

オルフはいろいろな音楽教育のアイデアを提示した。しかしそれらはメソッドではない。筆者は子ども達が興味を向ける周りにある素材を音楽遊びに取り入れてきた。それは子ども達との活動を展開していく大切なきっかけとなった。手作り楽器、木の実、木の枝、シャボン玉、リボン、紙テープ、新聞紙、水の入ったコップなどの素材は子ども達の表現を引き出してきたと感じている。子ども達が発する声、言葉のリズムを取り出して、皆で合奏することもあった。オルフの理念に共感した保育者は、自らアイデアを見出しつつ音楽活動を創り出していくことが求められるのである。

まず筆者は、保育に取り入れられそうな音楽教育の具

体的な方法を身につけたいと考えて研修に通いだした。しかし、その研修のワークショップで知った具体的な方法を、そのままの形で自分の保育に取り入れることはできない。なぜならそれは子どもへの押し付けになるからである。また何より、子ども達は大人が意図したことを超えたところに興味を見出し遊びを創りだしていく存在であるからである。それゆえ、目の前の子ども達の興味、そして筆者との関係性によって、具体的な用い方を考えていかななくてはならなかったのである。

一方、筆者はこれらの多くの研修でのワークショップから、自分自身の感じ方が認められ、他者の感じ方をも認めながら共有感覚を作り上げていく体験をした。そこでは自分も人も大事にされ、お互いの気配を感じながら、感情の発散や表現をし、自分とそこにいる他者との一体感を持つのであった。

筆者は10数年の間にこれらの体験をしつつ、保育の仕事に携わってきた。勤務する知的障害児通園施設においては、障害があるとはいえ、まさに一人ひとりユニークな感性をもって子ども達は存在している。ここで筆者が実践してきた音楽遊びは、子ども達の興味と共に始め、創ってきたものといえる。保育現場で保育者に必要とされる音楽的感覚は、子どもの動きと、子どもが何におもしろさを感じているのかに気づき、それを音楽遊びのアイデアに取り入れて展開していくことだと、筆者は考えている。

筆者は2006年度から、S大学に新設された子ども発達学科で、演習「幼児音楽表現」を非常勤で担当することになった。筆者自身の保育体験から得た幼児の音楽表現の指導方法を、保育者を目指す学生達に伝えていく機会が与えられたのである。保育者養成はまず、学生自身が自分の感性をひらき、お互いの感性に気づき、認めあっていくことから始まる。そして、さらに学生一人ひとりが自ら幼児と音楽活動を創り出していく力をつけていくことも視野に入れて、授業をしていく必要があると考えたのである。

保育者養成における音楽教育のあり方については、日本保育学会において、「保育専門職の養成」分野で研究発表が行われている。しかしその多くは、保育者養成校でのピアノ指導、声楽指導など音楽技術に関するものや、模擬保育の考察である。そんな中で、池谷潤子による「学生の中の気づきを育てる」継続した授業研究は、保育者として感性を引き出し認め合い、学んだことをもとに伝える力をつけていくのを目的としたもので、注目に値する<sup>1)</sup>。

本稿は筆者が保育者養成教育に関わって2年目の実践

を対象とする。学生が演習「幼児音楽表現」で学んだこと、そして課題とした『窓ぎわのトットちゃん』についてのレポートから、学生の気づきについて考察する。そのことを通して、保育者養成教育における音楽教育のあり方と、保育者が持つべき音楽感覚を覚醒させる具体的な方法についてひとつの提起をすることを目的とする。

## 1. 演習「幼児音楽表現」について

演習「幼児音楽表現」は、保育士資格を取得する場合の選択必修科目（半期2単位）である。主に1回生を対象に開講されており、資格取得を希望する学生のほぼ全員が受講している。本研究では2007年度前期の授業を対象とする。受講学生は63人で、男女比は1：3である。

### (1) 演習のねらいとポイント

筆者は、講義要綱に以下のように本演習のねらいをあげている。

「幼い子どもの音楽表現は音楽単独ではありえず、からだの動き、声を伴っている。まず保育者自身が五感をひらき色々な音を体感し、表現していく楽しさを体験しなければならない。この授業では、実際にからだを動かしながら日常生活、身の周りの様々な音、音楽に気づき、それらを題材として幼児の音楽表現を引き出し、創造的な保育をしていくことについて学んでいきたい。」

そして、実際に体験することが大切なので、授業への参加度・参加態度を重視すること、動きやすい服装を着用することなどを記している。

第1回目の授業では、まず教室に集まり、本演習でワークショップ形式で音楽遊び、音楽活動を体験すると伝える。その体験を通して、子どもの立場に立つこと、そして保育者の立場に立つことをイメージしてほしいと学生達に伝える。名前をお互いに呼びかけながら音楽活動するため、名札を作ってもらい、着用してもらう。そこまで伝え、演習室（子育て支援室）に移動し、実際に「幼児音楽表現」の演習が始まる。机も椅子もない、広いホールの演習室で本演習をはじめると、学生達は、この授業は他の授業とは様子が違うと気づく。

毎回の演習は、笑いと言声で非常ににぎやかである。計15回の演習内容を、シラバスと授業プリントから以下に記す。

### (2) 演習内容

演習の内容は次の通りである。

1回目：人への気づき  
(名前遊び、じゃんけん列車遊び、耳を澄ましてみよう、

大縄とび)

2回目：リトミック

(名前リレー、手拍子でリズム、手と足でリズム、3拍子を感じてみよう、go-stop-down、リトミックについて)

3回目：オルフの音楽教育

(手遊び歌、じゃんけんゲーム、音絵、隊列遊び、オルフの音楽教育—音と動きの教育—について)

4回目：コダーイの音楽教育

(絵本に歌をつけてみよう、二人でする手遊び歌、お手玉を使って、二人でするあやとりうた、コダーイ・システムについて)

5回目：動きと音楽

(ボディイメージ遊び、言葉のリズムを生かした遊び、フォークダンス、ミラーリング、カイヨワによる遊びの分類)

6回目：手具と音楽表現

(ボディーパーカッション、前進—バック、手具作り、手具を使った表現作り)

7回目：保育者の歌う声

(新聞紙を使った音楽遊び、水を使った音楽遊び、保育者の歌う声)

8回目：簡単な楽器作り

(楽器の発音のしくみ、楽器作り)

9回目：音を描いてみよう

(紙鉄砲作り、音を描いてみよう)

10回目：障害児保育における音楽遊び I

(プレイゴム遊び、びっくり箱遊び、インクルージョンを目指す音楽遊び)

11回目：障害児保育における音楽遊び II

(パラバルーン遊び、タオルを使った音楽遊び、多感覚な音楽活動をしていくことについて、手話の歌)

12回目：唱歌

(唱歌について、7.5調のリズムで替え歌作り)

13回目：大正期の童謡

(童謡について、歌詞の聞き取り、北原白秋作『お祭り』での作品作り)

14回目：第二次世界大戦後の童謡

(戦後の童謡、子どもに呼びかける替え歌作り)

15回目：わらべうた

(わらべうたについて、昔話とわらべうた、まりつき、音階分析)

### (3) ワークシートとリアクションペーパー

筆者は毎演習ごとに、学生にワークシートとリアクションペーパーを書いてもらっている。ワークシートで

は、それぞれの演習でのポイントを学生自身がまとめることと、そこから感じ学んだことを記してもらう。楽しく遊んだことの中に、子どもの感性を動かし、発達を促していくヒントがある。そのことに気づいてほしいと願うからである。

1回目の演習時にワークシートで各自の音楽歴、公的・私的に受けてきた音楽教育について振り返ってもらった。

それによると、音楽に対して苦手意識を持つ学生も少なからずいた。しかしその中には、保育者を目指すのでピアノの授業をがんばりたいと臨んでいる学生もいた。できない、と開き直るのではなく広く音楽経験しておくことは必要であろう。本演習においては、苦手意識を持つ者にも、これまで受けてきた音楽教育とは違った音楽体験をして、音楽の楽しさを感じてもらうことをねらいとしたい。さらに保育者として子ども達と共有していくことの大切さに気づいてもらいたいと考えた。

リアクションペーパーでは、90分の演習全体からの感想と気づきを文章にして提出する。保育の仕事は、まず子ども達と楽しく遊ぶことからはじめ、工夫を重ねて展開し、子どもの成長を願い支えていくことである。そのためには、瞬時の感性が必要であると同時に、子ども達の園生活の中にこれらの遊びを組み入れ、長期にわたる取り組みをしていくことが求められる。そこで保育行為を考察し、言葉に表して文章にしていくことが重要になってくると筆者は考えている。そこで、保育者を志す学生達にもリアクションペーパーを書くことによってこれらの経験を少しずつでもしてほしいと願っている。

ワークシートとリアクションペーパーに対して、筆者は現場感覚をリアクションとして書き込み、次週に学生に返している。そうすることで学生自身が幼児の音楽表現や保育の仕事について考え続ける姿勢を持ってほしいと願っている。

#### (4) 演習と学生の感想

ある学生は、本演習で動きと共にある音楽活動を経験した感想を次のように表している。

「今まで受けてきた音楽の授業では、皆で一緒に歌を歌ったり楽器を演奏したりというものでした。そこでは音楽が嫌いであったり苦手であったりすることで授業に参加していない子がいたのも覚えています。幼児音楽表現の授業を始めて受けたときは本当に驚きました。自己紹介のやり方も、普通なら名前などを言って終わりだけれど、この授業ではリズムに合わせて名前を言ったり、好きな果物を言ったりとすごく楽しいものでした。リ

ズムに合わせての自己紹介なら最初からみんなが打ち解け、楽しみながら笑いあって仲良くなれるような気がしました。」

この学生のように、多くの学生にとって本演習の内容は「初めての経験」で「驚いた」内容であったと考えられる。

この学生があげた「名前リレー」「果物リレー」の演習内容は次のようなものであった。

<名前リレー>

皆で輪になり、一つのリズムを感じながら名前を順に言っていく活動である。2拍子で(××○○:×は手拍子、○は自分の名前を言う)、そのリズムを崩さず、順に一人ずつ名前を言うことをリレーにしていく。

<果物リレー>

名前リレーに続いて、同じく2拍子で(××○○:×は足踏み、○は好きな果物を言う)、順に一人ずつ好きな果物を言うことをリレーにしていく。

続いて、3拍子で(×××○○○:×はひざ打ち、○は好きな果物を言う)行う。

これらの活動は、2回目の演習の始めお互いに知りあいたいと願って行った。一つのリズム感を共有しながら、一人ずつ声を発していく。手、足、ひざでリズムをとることを通して、身体でリズムにのることを体験する。2拍子から3拍子に変えて、そのリズム感の違いも感じてみようとした。一定のリズム感を皆で共有することによって、そこにいる皆が一体感を感じるのである。しかし言い損なうとこのリズムが崩れる。そのときに皆の緊張感が緩んで笑いが生じる。この笑いが生じる構造があるから、遊びはおもしろくなるのである。

次に、自由な動きの表現を引き出すための手具として、リボン棒を作って音楽表現をした。この演習についての学生の感想をあげる。

「はじめにカラフルなりボンを目にした子ども達は、視覚に刺激を受け、手にしてみたいという意欲が生じる。そしてそれを割り箸の先につけテープを巻くという作業が、子どもの創造力、手先の器用さを発達させ、それを音楽に合わせて自由に動かすことで、子どもの感覚、想像力を引き出している。」筋肉や骨の動きを感じながら、リボン棒を握り音楽に合わせて振る。それは空間に対して表現を描き出していくことも言える。またなびくりボンから風を感じることもできる。このようにいろいろな感覚を呼び覚ましていく。

別の学生は「こうして多感覚を使うと同時に頭もよく使っていることがわかる」と表している。さらに、自由に自分の身体を動かしていく実感から、「自分が自分であるという認識」を得ていく。

続いてこの演習では自由な表現を引き出す一つの方法として、「ミラーリング」を体験した。ミラーリングとは「ミラー＝鏡」のように相手の動きを真似するのである。

#### <ミラーリング>

①二人組みで、動きをする人、鏡役をする人を決め向かい合って立つ。動きをする人はその場で、曲のフレーズを感じながら体を大きく動かしていく。鏡役はその動きを真似ていく。そのとき同じく曲のフレーズを感じながらするとやりやすい。一方の人が動きを伝えようとし、鏡役の人がそれを感じ取っていくこと、相互に気持ちを交わしていくことを経験していく。

②作ったリボン棒を持ち、10人のグループで一つの表現を作って発表した。ここでもある1人の動きを、他のメンバーが真似して映し出していくミラーリングの手法が用いられた。

このミラーリングで重要なのは、鏡役の人は相手の表現することに気持ちを集中させて、すべてを肯定し受け入れることである。そしてその通りに真似をして返すのである。その時鏡役の人は、相手のするがままに従って自分をなくしてしまっているのではない。共に表現を作り出していく存在である。

このような演習を積み重ねることによって、学生は様々な種類の音楽を聴き、身体表現や声を発していく心地よさを経験していった。

#### <楽器作り>

簡単な楽器作りを通して、発音のしくみ、音を大きくする仕組み、音程を作る仕組みを学べるようにした。演習ではトイレトーパー芯を使って、カズーとかつこう笛を作った。カズーはセロハンに声を震わせて声質を変える楽器である。かつこう笛は芯に開けた穴にストローを貼る角度と貼り方をいろいろに変えて試行し、音が鳴る位置を探す作業が必要となる。学生は息を吹きいれながら微調整を繰り返していく。なかなか音が出なくて、いやになってしまいそうにもなる。しかし学生同士アドバイスしあい、試行錯誤するうち、「ピー」と鳴ると、学生の表情はきらっと輝く。音が鳴るようになると、い

ろいろな音程を作り出していくこともでき、学生達は時間中ピーピーと吹き続けている。この様な作業を通して、音を出すということは、体内から体外へエネルギーを表出していく活動であると理解していく。子どもが幼ければ幼いほど、楽器を用いて音を出すことは、エネルギーを要する。

#### <障害児保育における音楽遊び>

今日では障害のある子ども地域の保育所、幼稚園で集団保育を経験できるようになってきた。そこで保育者を志す者は、障害のある子どもと共に楽しめる保育を模索していく必要があるのである。音楽遊びにおいては、その手だけでは多感覚な音楽活動にあると筆者は考えている。それは音楽を耳で聴くだけでなく、五感に加え、平衡感覚と、身体感覚すなわち骨や筋肉が感じる固有感覚で感じられるような要素を含ませて音楽遊びを組み立てていくということである。そこで筆者の障害児保育の経験から実践例を提示し、実際に試みて、学生が配慮点を知り、保育のアイデアを考えていくようにしている。

筆者は、障害のある子どもと共に楽しめる保育作りをするためには、子ども理解はもちろんであるが、保育内容について研究を深める必要があると考える。15回の本演習は全てそこにつながる。

#### <唱歌・童謡・わらべうた>

保育者として子どもと共に歌い、歌という一つの文化を子どもに伝えていく役割は大きい。どんな歌を子どもに伝えるか選曲することも保育者には必要となる。そのために、日本の子どもの歌の歴史について、唱歌、童謡そしてそれら以前からあるわらべうたについても学生達は学んでいる。明治時代に学校教育が始まったが、その時から作られるようになった唱歌は、西洋の歌曲を日本語に翻訳したもので、日本で独自に作られた唱歌も含めて、日本語の語調、すなわち7・5調のものが多い。学生には唱歌で替え歌を作ることによって、この特徴をつかんでほしいと願っている。

また大正自由教育運動の影響を受けて作られた童謡は、自由な詩によるものが多く、唱歌のそれとは性格を異にしている。そこで歌詞を聞き取ることと、また戦後のさらに自由な童謡では語調にとらわれずに替え歌を作ることを試みた。

そしてわらべうたでは、地方によって少しずつ言葉や旋律が違うことなどを、学生の様々な出身地をたずねながら学べるようにしている。

学生達は、「よく歌う子どもの歌が、明治時代に作ら

れたと知って驚いた」、「こんなにも長い間歌い継がれている歌なんだと知った」、「好きな童謡は言葉のリズムがいい」、「『このぼりのうた』や『ひなまつり』『おうまのおやこ』のようにどこの子どもも歌っているような歌と、その園の子だけが歌っているような歌がある」、と感想を書いた。この様に、多様な視点から、保育者が選曲して子どもに与えることの重要性にも気づいた。

## 2. 『窓ぎわのトットちゃん』のレポート

### (1) 『窓ぎわのトットちゃん』の教材性について

本演習は、出席、参加態度、ワークシートとリアクションペーパーの記入に加え、課題として2回のレポートを書いてもらい、総合的に評価した。そのレポートの一つが、『窓ぎわのトットちゃん』である。

まず、なぜ筆者が『窓ぎわのトットちゃん』をレポート課題として取り上げたのかをまとめておきたい。

#### ①トットちゃんとトモエ学園

『窓ぎわのトットちゃん』はタレント、黒柳徹子さんが自分の小学校体験を書いたエッセイである。目次に続いて、「これは、第二次世界大戦が終わる、ちょっと前まで、実際に東京にあった小学校と、そこに、ほんとうに通っていた女の子のことを書いたお話です<sup>2)</sup>。」という文章から始まっている。この小学校はトモエ学園という私立の小学校である。トットちゃんとは黒柳徹子さんのこと。トットちゃんは公立の小学校に入学したものの、先生の手にもたえられないほど困った行動をする子どもであった。例えば、授業中窓ぎわに立って外を見てチンドン屋を呼び込んだり、鳥に話しかけたり、また机のふたを開け閉めし続けるのである。クラス中の迷惑になり授業にならないということで、退学してトモエ学園に転校したのである。それまで、小学1年生のトットちゃんは、周りの大人が自分に手こずっていることには気がついていなかったようだが、おぼろげに一人だけ疎外されているようには感じてきた<sup>3)</sup>。しかしトモエ学園に来て小林宗作校長に「君は、本当は、いい子なんだよ<sup>4)</sup>」と受け入れてもらい、安心して学校生活を楽しんでいく。

#### ②小林宗作が創始したトモエ学園について

トモエ学園は小林宗作によって、1937年(昭和12年)自由ヶ丘に設立された。小林の経歴をみると、小林がトモエ学園でどのような教育をしたかったのか推察できる。

明治26年生まれ、群馬県出身の小林は、小学校代用教員をつとめながら東京音楽学校で学んだ。そして大正6

年から12年まで成蹊小学校で音楽教師として勤める。この小学校は大正デモクラシーを背景に新教育を求めて設立された私立学校である。ここでは午前中は授業、午後は「遠足」に出かけ、音楽を重視し、個性尊重の教育が目指された<sup>5)</sup>。

幼児期にこそ音楽教育の第一歩があると悟った小林は、欧州の幼児教育を視察するために旅立った。そして、パリのリトミック学校に入学し、リトミックを創始したエミール・ジャック＝ダルクローズに直接師事したのであった。ダルクローズは聴覚だけでなく身体の運動行動に訴える教育により、はじめて音やリズムに対する感覚を覚えるということを発見した<sup>6)</sup>。リズムを通して筋肉組織を訓練する、音楽と身体運動を連合した教育方法であるリトミックを学んだ小林は、大正14年に帰国する。すぐに、開園されたばかりの成城幼稚園で実践し展開していった。ここで、小林のリトミックは「総合リズム教育」理論に発展していった<sup>7)</sup>。

小林はその後の昭和12年に、トモエ学園を設立した。この学校の校門は生木でできていて、古い電車が校舎であった。トットちゃんの学年の生徒数は9人(その後転入してきた子どももあり、トットちゃんの同級生は12人いたようである)、全校生徒は50人くらいの学校である。教室での席は決まっていなくて、すきなところに座って授業が始まるのだが、自主学习で勉強が進められていた。一日に学ぶ全科目の問題を先生が黒板いっぱい書き、どれでも好きなからはじめるのである<sup>8)</sup>。そして午後は散歩に出かけた<sup>9)</sup>。これら自主学习と散歩学習は、大正自由教育の実践にみられるものである<sup>10)</sup>。それらは定型化した一斉授業への疑問や批判から起こったものであった。

子どもが主体となる学習は、動機と興味を持った学習であり、実地生活に結びつき、観察し学習したことを組み立てていくものである。そのような教育へと質的な転換をしようとしたものであった。自由教育の理念を受け継いだトモエ学園は、それぞれの教員が創意と工夫をしながら授業を作り出していたようである。例えば、農家の人と一緒に畠作業をしながら、耕し方に始まり、種まき、肥料、虫のこと、鳥のこと、天気のことなどを長期間かけて総合的に学んだ。これは今日の「総合的な学習の時間」にあたるものであり、大正自由教育の影響のもとにすでに実践されていたことに注目したい。トモエ学園は小林によって、そのような新教育の理想を、そしてリトミックを追求すべく設立されたのである。

『窓ぎわのトットちゃん』では、トットちゃんという生徒の立場から、トモエ学園の教育が描かれている。トッ

トットちゃん自身が大事にされたこと、ユニークな教育であったこと、生徒達がまるで遊びながらわくわくどきどきしながら学んでいる姿が見られる。日本にリトミックを持ち込んだ小林自身のその実践と、生活に即した学習に、子ども達が楽しく取り組む様子が読み取れる。

また、トモエ学園では障害のある子どもと共に学んでいた。トットちゃんの記述によると、同学年には、小児麻痺の泰明ちゃんと、身長伸びない病気の高橋君がいたようである。トットちゃんは彼らに「どうしてそんなふう歩くの？」と聞いたり不思議に思うこともあったようだ。しかし、普通に友達づきあいが始まり、プール学習や運動会も一緒に体験した。

### ③トットちゃんの家庭生活について

本著では、トットちゃんの家庭での生活についても詳しく書かれている。ハチャメチャな行動を重ねていくトットちゃんに、母親は悩みながらも子育てを楽しんでいる様子が伺える。飼っている犬とのふれあい、ヴァイオリニストのお父さんのこと、習い事のこと、手話をする人を見たこと、在日朝鮮人のマサオくんとの出会い、そしてそれらの人生をつぶした戦争について、黒柳さんが記憶をもとに書いたエピソードである。黒柳さんが自分の周りのことに感受性鋭く興味を向け、それらから彼女が多くを学んだことがわかる。それは本著を読む者にも、それらについての問題意識を呼び覚ますものとなる。

### ④リトミックについて

トモエ学園では音楽の時間が多く、中でもリトミックの時間は毎日あった。小林自らがピアノを弾き、2拍子を歩く、3拍子を歩くことから始まり、4拍子、5拍子、6拍子と、両手を指揮風に上げ下ろしするという活動をしたようである<sup>11)</sup>。これはリトミックにおける、音と身体動作の即時反応であろう。トットちゃんらは気持ちよく、考えながら楽しんでいた。

小林は、リトミックをすることによって、子どもの集中力や意志を養うことができると考えた。その信念は、成城幼稚園に勤務した時期に得たものである。それは、ダルクロウズの理論を越えて、自ら考案した「総合リズム教育」の理論である。これは、成城幼稚園の経営が小田急線沿線の宅地開発と共に意図的にすすめられ、そこに移り住んできた新中間層の家庭の教育要求と結びついて、小林が実践し獲得した理論であった。すなわち、リトミックをすることによって、よい体、よい頭、よい性格を兼ね備えた<よい子>を目指すことになっていったのである<sup>12)</sup>。

小林の成城幼稚園時代のリトミック実践は、そのような大人社会が望む子ども像に合わせるために行き過ぎた方法になってしまった一面があるのではないかと筆者は考える。では小林の成城幼稚園時代の<よい子>像が、トモエ学園での実践の中にそのまま引き継がれていたのだろうか。筆者はそのようには考えない。むしろ、子ども自身が音楽によって感受したことと身体の動きを連動させて表現するというダルクロウズのリトミックの理念に立ち返ったのではないだろうか。小林は「文字と言葉に頼り過ぎた現代の教育は、子供達に、自然を心で見、神の囁きを聞き、靈感に触れるというような、官能を衰退させた<sup>13)</sup>」と嘆き、トモエ学園では純粋にリトミックに取り組んでいたのではないだろうか。

一方、日本の障害児保育の歩みを振り返ると、リトミックを積極的に取り入れた実践も見られる。運動機能と感覚機能の発達を促すことを目的として、障害の軽減のための訓練としてリトミックが用いられた<sup>14)</sup>。

リトミックは、音楽的な反応を通して子ども達の感覚を鋭敏にし、身体運動と思考とを活性化させることが目指される。リトミックには、子どもの感性や表現を引き出す長所がある。しかし保育や教育の文脈の中でそれが展開されていくとき、その社会が期待する方向に向けての教育手段となってしまうこともある。動くのが好きな子どもにとって、リトミックは楽しい音楽活動である。しかし、そこには保育の質に関わる重要な問題があることを心すべきであると考えられる。

### ⑤レポート作成にいたるまでの演習

このように、リトミックの実践は非常にデリケートな面を含んでいる。しかし、『窓ぎわのトットちゃん』を読む場合、その音楽や子どもの表現は文章から想像するしかない。第2回目の本演習でリトミックを体験し、またその他の身体表現を伴う音楽表現を経験した学生達は、自らの受講経験とあわせて本著を読み、トットちゃんが受けた音楽教育を想像し理解するのではないかと考えた。そこで、デリケートな面を持つリトミックであるが、恐れず本著をもとにレポート課題を課すことにした。

## (2)『窓ぎわのトットちゃん』学生レポートの考察

第1回目の演習時に、黒柳徹子著『窓ぎわのトットちゃん』(講談社1981)を参考図書とすること、購入もしくは図書館で借りて、6月末までに読んでおくこと、レポート1の課題とすることを学生達に伝えた。そして、第8回目の演習時にレポート1の課題を以下のように提示し

た。

<レポート1について>

テーマ：『窓ぎわのトットちゃん』から考えたこと

レポート作成のポイント

- ①トットちゃんが受けた音楽教育はどのようなものか。
- ②それについてあなたはどうか考えるか、その理由も書いてください。
- ③一番印象に残った場面を目次から書き出し、それについてのあなたの考えをまとめる。

この3点を必ず含めて文章にしてください(800字以上)。

第12回目授業終了時を提出締め切りとした。レポート提出数は56であった。このレポートについて、上記の①②③の内容を整理すると以下の通りであった。

①トットちゃんの受けた音楽教育について

- ・20世紀初頭、ダルクローズが開発したリトミックの影響を受けたもの。
- ・身体運動を通して音楽を身体で表現することによって、子ども達が様々な束縛から解放され、心の安定を生み、子どもをより発達させるのを目的とした音楽教育法。
- ・精神と肉体の協和・調和を図り、自分自身を表現できる機会を子ども達に与えようとした
- ・楽しむだけでなく、同時にリズム感や集中力が身につく。
- ・リズムに合わせて歩き、リズムが変わると歩き方もテンポにあわせて変える。
- ・小林先生が弾いているピアノの曲を聴いて床に音符を描く(聴音)。
- ・子ども達にとってはあくまで音楽遊び。
- ・お遊戯とは違って決められた形を求めない。
- ・生きている音楽。
- ・言葉のリズムを利用した。
- ・替え歌、絵描き歌もふくめて、トットちゃんはたくさん種類の音楽教育を受けた。
- ・トットちゃんのお父さんはヴァイオリニストで、音楽をしている人が身近にいと、音楽に興味を持ちやすく楽しさに気づけるようになる。

②トットちゃんが受けた音楽教育について考えたこと

- ・子ども達が楽しみ、身体を動かし、頭で考えながら音楽を体感しリズムを身につけることができる。
- ・音楽が苦手、と思うことなく受けられる。
- ・より多くの学校、幼稚園、保育園で取り入れるべきだ

と思う。

- ・小林先生のように自然に音楽に触れ、それぞれの個性や素質をのばしてゆくべき。
- ・音楽を通すことでいろいろな人と関わるができる。
- ・子ども達に自由に、楽しく音楽を教えることは、簡単そうに思えても意外と難しいのではないか。
- ・ただ自由に音楽を楽しめと言われても、何を自由に楽しめばよいのかはわからない。心で、体で感じる音楽をするにはどうすればよいのかということを考え、遊びの中で導いていくことが必要。
- ・ガチガチな音楽教育法(先生がピアノを弾き、子どもが歌うだけ)というありきたりな感じよりは、子ども達が持っている素質を損なわないで大きくしてやれる。
- ・その音楽教育によって園や学校が彼らにとって楽しみの一つになるのであれば、それだけでも十分リトミックの効果が出ていると思う。

③一番印象に残った場面について

複数あげて考察した学生もいるので、合計数はレポート提出数よりも多くなっている。目次より、次のようにあげられた。

- ・気にいったわ(1人)
- ・校長先生(2人)
- ・授業(1人)
- ・海のものど山のもの(5人)
- ・よく囁めよ(1人)
- ・散歩(1人)
- ・校歌(2人)
- ・もどしとけよ(2人)
- ・名前のこと(1人)
- ・大冒険(7人)
- ・一生のお願い!(1人)
- ・一番わるい服(1人)
- ・とびこんじゃダメ!(1人)
- ・「それからさあー」(1人)
- ・ふざけただけなんだ(1人)
- ・運動会(3人)
- ・マサオちゃん(2人)
- ・しっぽ(2人)
- ・はんごうすいさん(1人)
- ・「本当は、いい子なんだよ」(7人)
- ・ボロ学校(4人)
- ・はくぼく(1人)
- ・英語の子(1人)



- ・泰明ちゃんが死んだ（7人）
- ・ヴァイオリン（1人）
- ・約束（2人）
- ・ロッキーが、いなくなった（5人）
- ・さよなら、さよなら（3人）

### （3）学生のレポートについての考察

以上のことから、『窓ぎわのトットちゃん』を読んだことによる学生の気づきは、次のように捉えられる。

ここでは①②③のみに限定せず、学生がレポートに書いた内容全体について考察する。

#### i) 音楽についての理解

本演習で動きながら、遊びながら音楽活動をすることを経験した学生は、本著中のリトミックや音楽活動をイメージしやすかったと思われる。「リトミックの意味を文章で見ると頭が混乱して難しいように感じるが、実際にやってみて自分なりに表現してみた」経験とつき合わせたとも思われる。また、本演習での「手拍子でリズム」や「go-stop-down」で、音楽を動きで表しリラックス感や開放感を味わった体験を思い出し、音楽表現が自分自身を表現できる機会であることに気づいている。なにより、自分達がしているという実感と意欲が増していったようである。

音楽についての本質的な理解の変容が見られた意見をとりだしてみる。

「最近まで音楽とはただ教えられたとおりに歌ったり演奏したりして、上手くできるか美しく聞こえるかだと思っていた。しかし幼児音楽表現の時間やこの本を読む中で、音楽とは心と体の全身を使って感じ表現するものだと思います。」

このように、学生自身の音楽観の変化がみられるのは、今後多様な視点から保育者養成の学びを重ね、保育実習に臨んでいける可能性を感じさせるものである。また、今後それぞれが抱く理念を具体的に実践していく技術に身につけることも必要となってくる。

保育者養成教育の初期の段階で、幼児の音楽表現について考え深める機会を持ったことは、今後の具体的な保育実践の学びへの動機付けになるのではないかと考える。

#### ii) 子どもへの理解、個性の尊重の重要性を学んだ

ある学生は、トットちゃんは勝手な行動ばかりをするので、はじめは障害児なのかもしれないと思ったと書いていた。実際トットちゃんは、公立の小学校では興味を

持ったことに熱中するあまり問題児とされていた。しかし、トモエ学園では、変わっている、と投げ出されるのではなく個性的と理解してもらった。小林校長の「本当は、いい子なんだよ」という語りかけは、本人にも、周りの者にも偏見や差別を植え付けない配慮であり、自尊心を大切にしてほしいという思いを込めたものだったと考えられる。

ある学生はそれを「常識のある」と、また別の学生は「人として当たり前のことを普通にする」と表現した。障害児やアメリカからの帰国子女を受け入れ、共に学んでいく教育方法を見出していったトモエ学園は、まさに当たり前のことを普通にした教育実践だった。それを子どもへの理解、個性の尊重と呼ぶなくてはならないほど、今日の教育には常識を外れている現実があると、学生達は感じているのかもしれない。

教育する意気込みに埋没して一人ひとりの人格が見えなくなることを戒め、一人の教師が一人の人格のある子どもを前にして「常識ある」接し方をする必要があると学生達は気づいたと考えられる。保育者を目指す彼らが、子どもを理解し受け入れることの大切さについて、小林校長の姿から具体的に考えることができたのではないかといえる。

#### iii) 子どもの感性というものに気づかされる

トットちゃんは積み上げた壁土の山に飛び込んでみたり、トイレに落としした財布をかき出そうとしたり、茂る草のトンネルをくぐって毎日服を破ってしまうなど、大人の日線で見ると、してほしくないことを次々としては、大満足をしている。トットちゃんの記憶によるエピソードなのであるが、それらが子どもにとっていかに面白いことだったかが記されている。トットちゃんは、手触り、踏みしめた感じ、におい、光、吹いている風など、いろいろな感覚でそれらを体験していたのである。

ある学生は、「垣根のはしからはしまで、ジグザグに『ごめんさいませ』と『では、さようなら』と出たり入ったりと繰り返して、大人には分からない楽しさを楽しんで一生懸命になっているトットちゃんや、砂の山や新聞紙に向かって“おもしろそう”とすぐ飛び込んで行ってしまふ好奇心旺盛なトットちゃんなどが書かれており、とてもおもしろかった。子どもが何に興味を持ち、どのように思っているのかが深く書かれた本だった。」と書いている。

明らかに幼い子どもは、大人とは違った感性を持ち、違った時間感覚で楽しんでいるのが分かる。子どもを理解しようとするとき、この子どもの感性というものへの

想像力と、それを一緒に引き受けようとする覚悟が必要となる。この点についても学生は触発されたのではないかと考える。

#### iv) 工夫された教育

「海のもの」と「山のもの」は食事についてのエピソードである。小林校長はお弁当のおかずについて保護者に「海のもの」と「山のもの」を持たせてください」と頼んでいた。栄養が偏らないようにという願いを、このようにユニークに表現して、子ども達も自分のお弁当の中を見て、どれが海のものか山のものか考え合っていた。

5人の学生が印象に残った場面としてこの点をあげている。学校生活のすべてに、子どもが学べる材料が隠されており、それを見つけ出し、自然な形で子ども達に提示し、考えさせるという教師の働きを、この場面から見出したと考えられる。

トモエ学園では、子ども達が遊んでいるような気分できているいろいろなことを学んでいる。好きな科目から各自取り組んでいくのもそうだった。散歩で出会うことを通して、いろいろな学びが展開していくのであるが、この時に教師としての特性が出るのも興味深い点である。

障害のある子どもへは、皆と同じように学校生活が楽しめるような、表に見えない配慮がなされていた。子どもだったトットちゃんには、具体的にどのような配慮があったのかはわからない。しかし、ちょっとした工夫で、一緒に楽しめ、本人に自信を持たせることもできる。その可能性があることを、学生達は学んだのではないかと考える。

このような工夫された教育は、前述したように定型化した一斉授業への疑問、批判から起こった大正自由教育運動を引き継いだ実践であった。

音楽教育の分野でも、明治期からの唱歌教育に飽き足らず、子どもには子どもの歌を、と童心を歌う童謡が大正時代以降多く作られた。これについては第13回目の演習で取り上げた。明治以降の教育史の中で、トモエ学園のような自由でユニークな授業実践があったことを学生達にも知っていてほしいと願う。

#### v) 生と死

トットちゃんの友達への関わりの中で、最も強く学生をひきつけたのは、小児麻痺の泰明ちゃんと木登りをした「大冒険」であった。筆者も、危ない、がんばれ、と心の中で声援を送りながら読んだことを記憶している。絶対に泰明ちゃんを登らせるというトットちゃんの熱い思いと、トットちゃんを信頼して任せていく泰明ちゃん

の、その双方の思いが純粹であったのである。

そんな体験を共にした泰明ちゃんが亡くなったことに続いて、家で飼っていた犬がいなくなった。重なる悲しみを前に、「冷静に周りの様子を見たり、自分の心が普段と変わっていない」と、トットちゃんが客観的であることに驚いた学生がいた。その一方で、「大人が思っているよりも子どもは遭遇する事柄を敏感に受け止めている」と感じた学生もいた。両者共に「生と死は常に隣り合っているものということへの気づき」があったのではないだろうか。それは戦争が激しくなっていく時代の中でも、子どもが持ち前のたくましさで育っていったこととも重なっている。

#### vi) 教育への情熱を感じとる

本を読むということが苦手で、このレポート課題でも本著を読むことに乗り気でなかった学生が数人いた。しかしそんな学生も、読み始めたらどんどん熱中して、読みやすかった、面白かったという感想を伝えてくれた。あとがきまで全部読んだ本は初めてだったという学生もいた。読んで書く、という忍耐の要るレポート課題であるにもかかわらず、56人が読み切ることができたのである。これは本著が保育者を志す学生に訴えるものを多く含んでいるからに他ならない。

そこには、トモエ学園の教育とトットちゃんのユニークな生き方を支える、小林校長の存在が大きいと考えられる。多くの学生が、小林先生のような先生になりたいと述べているのである。リトミックのような具体的な実践方法を身につけていることへの憧れもあるだろう。そして何よりも小林が、教育への情熱をもち続けていること、子どもを大事にしていることに学生達は惹かれるのであろう。トモエ学園の子ども達は、小林の教育方針には気づいていなかっただろう。しかしそれは子ども達に伝わっていたのである。

### 3. 保育者養成教育における音楽教育のあり方と方法について

以上の考察を通して、保育者養成教育における音楽教育のあり方と方法について次の3点を提言したい。

#### (1) 自分の受けてきた音楽教育を問い直す

学生達は「幼児音楽表現」の演習で、動きとともにある音楽活動を体験してきた。そのときの音楽、動きの表現をもとにして、トモエ学園のリトミックについての描写を読んだと考えられる。学生は、演習での体験とその振り返りと、『窓ぎわのトットちゃん』の読書レポート

課題に取り組むことと、その双方を交錯させたといえる。そのことによって自己の感性への気づきと、子ども達の感性を大切にせる保育者になりたいという志を強くしていったと考えられる。

学生達は、これまで10数年間の学校教育の中で、知的技能鍛錬型の偏差値的思考をせざるを得ない土壌に生きてきた事実がある<sup>15)</sup>。それゆえ保育者になる者には、学校生活の中で自分が身につけてきた価値観や思考の枠組みが狭いものであると気づくための問い直しが必要となる。

これまでの教育の中で自分に対して肯定的な評価を受けることが少なかった者もいる。彼らの自信を回復させつつ、子どもの感じ方を受け入れ保育を創りだしていく保育者への歩みへと導いていくことが、保育者養成教育には必要なのである。

## (2) 音楽教育のあり方を問い直す

保育者養成教育における音楽教育のあり方について考えようとするとき、学生達がこれまで受けてきた音楽教育は、19世紀のウィーンを中心としたロマン派様式に根ざした音楽に偏りがあったことを指摘しておかねばならない。すなわち世界の中の、ごく一時代の音楽の教育を受けてきたのである。これは音楽文化の中のほんの一部であることを、まず学生達が知っておく必要があると考える。わが国の明治期以降の音楽教育は、公教育も、私的な教育もともにそのような偏りを持ったものであった。

小林が日本の教育界に紹介し、自らの実践の中で総合リズム教育にまで発展させたリトミックは、上記のようなヨーロッパの音楽を体得するには効果的であると筆者は考える。すなわち、西洋音楽は重力に反する、上に向かうエネルギーに基づくリズム感を持ち、地面から飛び上がり着地するという動きの中で生じてきた。それゆえ同じく動いてみることで体感しやすくなる。

西洋の音楽が上に向かうエネルギーによって拍節感を生じていくのに対して、日本の音楽は強弱のない2拍子系である。これは泥田の中を静かに右足・左足と順番に動かしていく両足の動きの感覚から生まれたと言われている<sup>16)</sup>。このリズムは、わらべうた遊びをする子ども達の身体リズムや発声の中に見出すことができる。

幼児は、体の動きや声と共に音楽表現をする。それゆえ筆者は、西洋音楽に偏らず、日本の音楽、またそれぞれの地方の音楽の拍節感、リズム感を認識して保育活動に取り入れることができればよいと考える。身体の動きを伴った音楽表現を体験するとき、そのような視点を

持つ必要があると考えるからである。

## (3) 音楽教育の方法

そこで、保育者養成における音楽教育の方法として、筆者は以下の3点を考えるのである。

第一に、あらゆる感覚を使って音楽を感じる経験をし、感性をひらくことである。これまでの価値観や枠組みを広げ、緩やかにすることにもつながる。

第二に、西洋音楽のみならず、日本の音楽、民族音楽にもふれ、それぞれの音楽の身体リズムがあることを知ることである。これらは、いわば「自分ほぐし」を体験することとなる。

第三には音を創りだすことそれ自身が、身体からエネルギーを注ぎ出す表現行為であるという点を体験することである。

これらの体験を経て学生は、子どもの表現を尊重しながら、音楽遊びを構築していくという視点を得ていく。

トモエ学園では、一人ひとりの子どもの感性を引き出していけるようなユニークな教育方法を創りだしていった。それを可能にしたのは、小林自身が真摯に音楽に向き合い、音楽の世界の豊かさを前にして自身を高ぶらず、卑下することもなく生きていたからであろう。保育者養成においても、音楽表現をしながら、学生達がお互いの感性を尊重しあうことを経験してほしいと願っている。

## おわりに

学生達は保育者を志して入学してくる。その志の固い者もいれば、まだそれほどしっかりとしていない者もいる。筆者は保育者養成教育において初期の段階、すなわち入学後の半年間が非常に重要であると考え。それまでの学校教育での評価とは異なる価値観や感性に気づくことによって、子どもの感性を大切にせる姿勢で学んでいくことが始まるからである。お互いの表現を尊重しあう経験を重ねると、学生の表情は生き生きしてくる。そのプロセスで保育者になる志も少しずつ確かなものになっていくことを筆者は望む。

また保育の仕事には力量も必要である。ある学生は『窓ぎわのトットちゃん』を読んで、「がんばろうという自信ももらった」と書いた。保育者になるための学びは決して楽なものではない。また保育者になってからも学び続ける必要がある。その覚悟が学生の側から自覚されつつあるのではないか。保育は、子ども達と共に創りだす創造的な営みである。筆者は保育現場の経験者として、保育の仕事をする喜びを学生達に伝えていきたいと考える。

保育者養成校に入学したものの、学んでいく動機を見つけれず、保育者に向かう学びが定着しない学生も存在する。彼らの感じ方を受けとめいかに接点を持っていくかが、現在の筆者に与えられた今後の課題である。

<注>

- |  |  |
|--|--|
| <p>1) 池谷潤子「学生の中の「気づき」を育てる～「ふりかえり」によって生まれる「気づき」に注目して」日本保育学会第60回大会発表論文集2007.p.604-605</p> <p>2) 黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』講談社1981.p.7</p> <p>3) 同上.p.31</p> <p>4) 同上.p.198</p> <p>5) 小林恵子「リトミックを導入した草創期の成城幼稚園—小林宗作の幼児教育を中心に—」『国立音楽大学研究紀要第13集』1979.p.78</p> <p>6) 土野研治「ダルクロワーズ(リトミック)による治療と教育」『障害児の成長と音楽』音楽之友社1984.p.109</p> <p>7) 福元真由美「1920-30年代の成城幼稚園における保育の位相—小林宗作のリズムによる教育を中心に—」『乳幼児教育学研究第13号』2004.p.56</p> <p>8) 黒柳徹子.p.40</p> <p>9) 同上.pp.52-56.pp156-161</p> <p>10) 明治末期にも、高等師範学校附属小学校において樋</p> | <p>11) 黒柳徹子.p.109</p> <p>12) 福元真由美、前掲書.p.59</p> <p>13) 黒柳徹子.p.111</p> <p>14) 筆者は発達保障理論に基づくリトミックを1985年にさくら・さくらんぼ保育園で見学し、1986年に斉藤公子のリトミック研修を受講した。いずれも、子どもの発達を促す実践として力あるものであった。しかし、そのまなざしが子どもに対しても、また保育者に対しても強すぎ、非常に張り詰めた雰囲気であったことは否めない。ピアノの演奏は子どもの動きを先導し、その演奏タッチは強く、ピアノの音色はひといろであった。本来、音楽の音色はもっと多彩なものではないか。また、それにふれた子どもの表現は多彩なものになるのではないかと感じた。</p> <p>15) 八木絃一郎「『保育研究』における表現・保育文化に関する検討課題」『保育研究16-4』1996.p.30</p> <p>16) 泉健「随想—略語は二拍子」神戸新聞1996.5月30日</p> |
|--|--|

## 保育者養成校における演習「幼児音楽表現」と学生の学習プロセス —ワークショップと『窓ぎわのトットちゃん』のレポートより—

和田 幸子

**要旨：**保育現場において保育者に求められる音楽的な力量は、演奏技術に基づくものではなく、子どもの感性と表現から音楽的要素を見出し、音楽活動として発展させていくことである。そのような視点で筆者は保育者養成校で担当する演習「幼児音楽表現」でワークショップを行い『窓ぎわのトットちゃん』のレポートを学生に課した。これらのことを通して学生は、まず自己と他者の感性への気づきがあった。また学生は、保育者とは子どもへの理解・個性の尊重、子どもの感性に基づき、柔軟に工夫して音楽遊びの方法を考え働きかけていく必要があることを学んだ。さらに学生は、そのプロセスにおいて徐々に保育者になる志が強くなってきた。